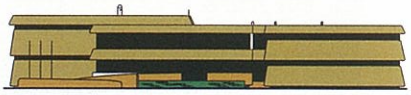
2013.3
No.62

苫小牧市 博物館だより



美術館併設後外観イメージ（CG）

特集

美術館併設リニューアルへ向けて

ワークショップ「苫小牧市美術館を考える」／「地域×アート×創造セミナー」／ 鑑賞教育プログラム ／ 美術館広報部・びとこま ／ 所蔵品検索システム「苫小牧市デジタルミュージアム」

特別展 ／ 移動展示 ／ 郷土学習 ／ 博物館大学講座 ／ 博物館クラブ ／ 土曜体験教室 ／ ゴーゴー博物館 ／ 勇武津資料館通信 ／ 見学会・観察会 ／ 館長コラム ／ 平成25年度展示事業計画

特集｜ 美術館併設リニューアルへ向けて

ワークショップ「苫小牧市美術館を考える」'12/06/06

今年７月に開館する美術博物館は、博物館と美術館の機能を備えた複合施設として設置いたします。平成22年度から23年度までに合計６回の「苫小牧市美術館を考える」と題したワークショップが行われ、「基本構想」「基本計画」が策定されました。

また、昨年６月に行われたワークショップでは、一般公募した市民を含め20人の参加を得て、25年度以降の「事業概要」、「管理運営体制」等について討議していただき、様々な提案をいただきました。

提案された内容を抜粋しますと、「小さな美術館だからできる特色のある企画を考えるべき」、「展示室の使用に関しての基準が必要」等のご意見をいただきました。

いただきました多くのご意見につきましては、今後策定する美術博物館規則等の参考にさせていただき、地域に根ざし市民に鑑賞と憩いの空間を提供し、市民に愛され、必要とされる美術館を目指して行きたいと考えております。

▲美術館のあり方について考える参加者たち

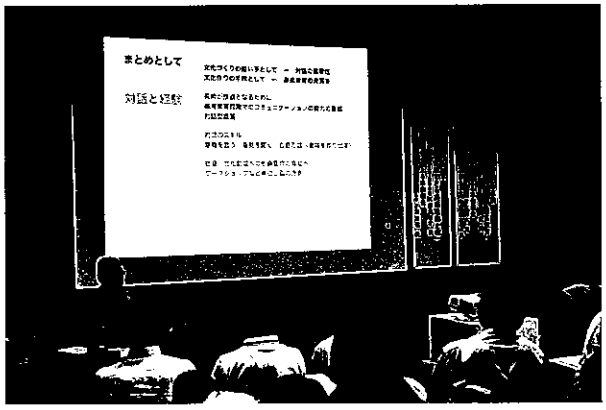
「地域×アート×創造 セミナー」'12/07/27

苫小牧市美術館基本構想では、「市民に開かれた美術館」、「子どもたちの感性を育む美術館」、「文化芸術活動の拠点としての美術館」と謳っています。地域のあらゆる人々が参加できる「アートを通じたまちづくり」に詳しい専門家を招いて学びを深め、課題を共有するため、７月27日に博物館講堂で「地域×アート×創造 セミナー」を開催しました。

教員をはじめ会社役員、大学職員、NPO法人職員、音楽家、主婦、退職者、高大生など様々な職域の方50名が参加した今回のセミナーでは、「地域と美術館」の研究および実践授業を行う武蔵野美術大学の三澤一実教授による講演がありました。さらに、同大学４年生の清水輝大さん、中田麻衣子さんが、学校へ出向き行う児童との実践授業の模様と記録集に関する報告をしました。

また、市内樽前地区を拠点に地域に寄り添った芸術活動を行う樽前artyの藤沢レオ氏、千葉和魂氏、堀米和克氏の３名は、樽前小学校での体験学習や地域住民との関わりについて講演と事例報告をし、地域での活動が一方的な「表現」ではなく、互いに豊かな「経験」になっていると話しました。

講演後、講演者と当館美術担当学芸員がパネリストとなって、参加者と意見交換会を行いました。立場が異なった方々の意見は、地域のこれからを担っていく「子ども」に集中しました。子どもたちが豊かに育っていくための「経験」の「場」として「美術館」がどのような役割を担うべきか、それぞれの立場から課題と方策が話し合われました。



▲基調講演をおこなう三澤教授

▲意見交換会の様子

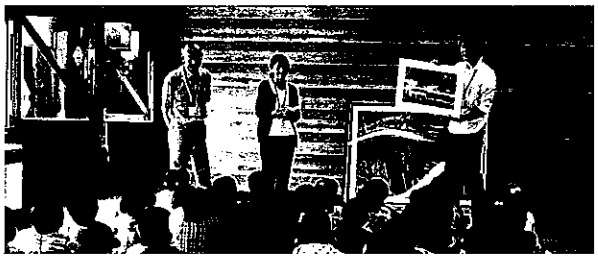
鑑賞教育プログラム '12/09/05, 09/06, 09/11

「子どもたちの感性を育む美術館」を基本構想のひとつとして掲げる(仮称)苫小牧市美術博物館では、所蔵作品を用いた対話型の鑑賞教育を積極的に展開していく予定です。

当館では、そのリニューアルへ向け、学校や大学機関と連携した鑑賞教育を実施するなど、その準備を進めてきました。美園小学校で実施した鑑賞教育プログラムは、同校が苫小牧を代表する画家・遠藤ミマンゆかりの学校ということもあり、同作家の作品を中心にとりあげ、美術作品に対する興味をもつことのできる内容としました。

遠藤ミマン《ジャズ》1997年

２学年３クラスを対象に実施した本プログラムでは、作品に関する知識を一方的に押しつけるのではなく、絵に対峙した際の子どもたちの感性を尊重するため、グループに分かれ、感じたことを話し合ってもらいました。遠藤ミマンの《ジャズ》を前にした児童からは、「シンプルで派手な曲が聴こえてきそう」、「ステージの下にたくさん人がいそう」といった声を聞くことができました。

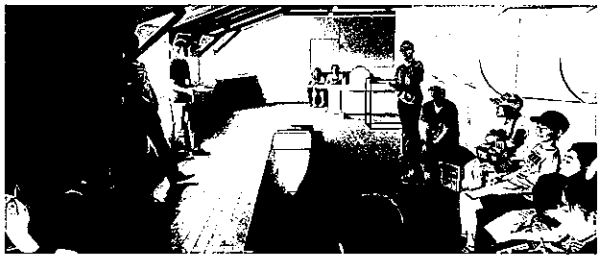

▲美園小学校で実施した鑑賞教育プログラムの様子

美術館広報部・びとこま

2013年７月に開館する（仮称)苫小牧市美術博物館を広く伝えたいと、小河けいさん（NPO学校と社会をつなぐエージェンシー）、樽前artyのご協力により、子どもたちが主体となった「美術館広報部」を立ち上げました。公募により各小学校から16名が参加し、広報誌「びとこま」（「美術」と「苫小牧」を覚えやすく、おもしろい響きにしたいと名づけました）を隔月で発行しています。夏の特別展や文化公園アートフェスティバルなど、美術に関する取材のほか、学芸員の仕事を学んだり樽前地区にある“工房レオ”を訪ね、藤沢レオさんの手ほどきで鉄の作品づくりにも挑戦しました。

また、当館の収蔵作品を展示した鑑賞会では、鑑賞を通して素晴らしい言葉がひきだされました。

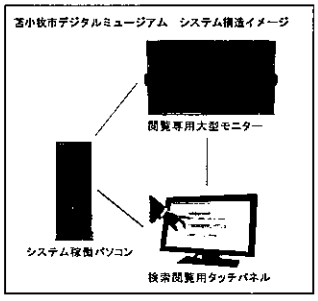
子どもの視線を重視し、「そもそも美術館って何？」という疑問にこたえた内容となっています。広報として始まった活動ですが、子どもたちが軽やかに感性を育んでいる姿から、大人も多くの刺激を受けています。


▲“工房レオ”に集まった子ども記者たち

所蔵品検索システム「苫小牧市デジタルミュージアム」

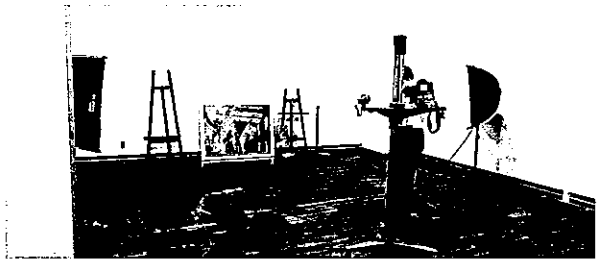
博物館と美術館の複合施設としてのリニューアルオープンにあわせ、所蔵品検索システム「苫小牧市デジタルミュージアム」を、館内無料スペースに設置します。

当館の所蔵品を検索・閲覧できる当システムは、まずはじめに、美術作品の公開を予定しており、その後、歴史、自然、考古など各分野の博物資料についても、随時公開していく予定となっています。



作品及び資料の写真撮影は、約1,000点の作品・資料を収蔵庫から１点ずつ運び出し、開梱、撮影、そして、梱包の繰り返しです。繊細な作業から大きな作品を運ぶ力仕事まで多岐にわたる大変な作業でした。

デジタル化された画像は、タッチパネルを用いて作者名、作品名、種別・テーマの３項目により検索が可能で、絞り込まれた画像は、大型モニター上で閲覧できます。また、郷土作家の所蔵作品については、当館ホームページ上においても「デジタルミュージアムコーナー」を設けて紹介し、苫小牧の芸術を広く発信していく予定です。


▲当館の所蔵作品を撮影する様子

特別展

トヨタ自動車北海道株式会社創業20周年記念事業

光から夢をたどって～印象派からエコール・ド・パリまで～ '12/07/14 -08/19

トヨタ自動車北海道株式会社が創業20周年を記念し、市民の皆様に日頃の感謝をこめて主催しました。

同社はこれまでにも当館を会場として「印象派の歩み展」(2002)、「東京藝術大学に集った画家たち展」(2004)、「エコール・ド・パリ～パリを愛した画家たち展」(2007)を開催しており、本展覧会が４回目の美術展となりました。

本展では、コロー、ドービニーなどのバルビゾン派から始まり、モネ、セザンヌなどの印象派・ポスト印象派続いてフォーヴィスム・キュビスム、さらにはモディリアニ、レオナール・フジタ、パスキンなどのエコール・ド・パリまで19世紀から20世紀前半のフランス絵画の流れをたどる絵画23点が展示されました。

セザンヌの《女性水浴図》やフランシス・ピカビアの印象派風の油彩画《モレ＝シュル＝ロワン池》、ジョルジュ・ブラックの《グラスと果実》など見所いっぱいの展覧会でした。

観覧者によるアンケートでは、やはりモネの《睡蓮》が断然の人気でした。本展の評判は日増しに高まり、市内だけでなく札幌圏をはじめ道内各地から多数の来館者を数え、観覧者総数は16,232名でした。

アメデオ・モディリアニ
《若い女性の肖像》 1918年

ポール・セザンヌ
《女性水浴図》 1883-87年

●主な出品内容（展示順）

ジャン・バティスト・カミーユ・コロー《木立の中の家》1870年、シャルル・フランソワ・ドービニー《河畔》1874年、カミーユ・ピサロ《エラニーの眺め》1884年、アルフレッド・シスレー《春の朝・ロワンの運河》1897年、クロード・モネ《睡蓮》1897-98年、フランシス・ピカビア《モレ＝シュル＝ロワン池》1904年、ピエール・オーギュスト・ルノワール《読書》1900年、ジョルジュ・ブラック《グラスと果実》1928年、ジュール・パスキン《下着姿の座る少女》1928年、レオナール・フジタ《立てる裸婦》1929年、アメデオ・モディリアニ《若い女性の肖像》1918年 ほか

関連事業

講演会「印象派からエコール・ド・パリで起こったこと」'12/07/21

講師　天野 一夫 氏（美術評論家、豊田市美術館チーフキュレーター）

印象派が登場する19世紀後半からエコール・ド・パリの20世紀前半の時代は、写真の発明やキネマトグラフ（活動写真）などの発達がありました。その技術革新は印象派以後の芸術にどのような影響を与えたのでしょうか。画家の立場や作者や市民の視覚の変容など、印象派以後の芸術の成立の背景を、当時の様子を語る貴重な映像資料等を使用しながら解説する天野一夫氏の講演に、参加者68名は興味深く熱心に聞き入っていました。

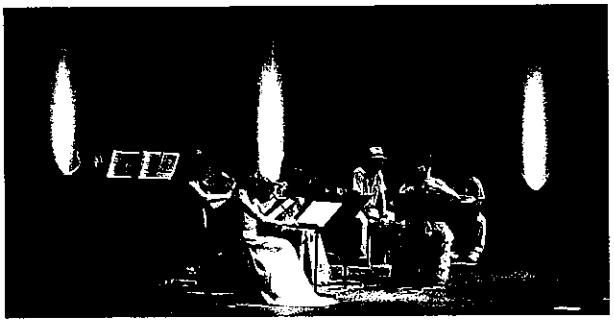
Music in Museum by 出光 2012「光の中へ…ブライトな昼下がり」'12/08/05

主催　出光興産株式会社

特別展に連動して毎年開催されている音楽会で、今年のタイトルは「光の中へ…ブライトな昼下がり」。

演奏者は、カルテット「B」（弦楽四重奏）、川田健太郎（ピアノ）、アントニオ・マルティ（トランペット）、カリメロミュージックプール（パーカッション）、ディーヴァス（ヴォーカル）の皆さん。

ドヴォルザーク作曲『アメリカ』など、会場には色彩感豊かな音楽があふれ、まさに印象派の絵画を彷彿とさせる光に包まれた演奏会になりました。



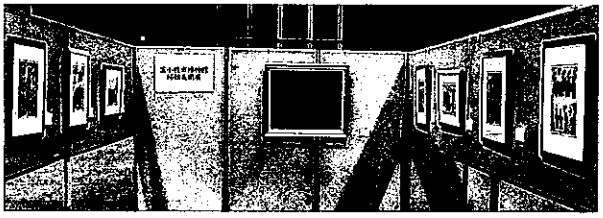
移動展示

移動美術展「能登正智展」'12/10/29-30

苫小牧市民文化祭合同展示発表が二日間にわたって苫小牧市総合体育館で行われました。当館は移動美術館として毎年収蔵品を紹介しています。

本年は能登正智（1922-2001）による版画シリーズ《マンモスの伝説》、《角のあるシャーマン》、《マンモスが行く》、《トナカイの居る原野》、《マンモスの道》、《ツンドラ原野》、《野牛を狩る人》、《トナカイの来る氷原》、《夜のマンモス》、《吹雪の日》と油絵《チヌカルコル(狩人)の星》の11点で、北の氷原を舞台に太古への想いを表現した作品の展示をしました。

能登正智は、戦後、油彩画で創作活動を始めました。昭和58年頃から本格的に版画を始め、版画集『山線軌道』を刊行、以後、版画集を多数刊行しました。苫小牧の歴史や自然、北に生きるものたち、アイヌの伝説を題材とした木版画を中心に79歳で没するまで制作しました。会場では、作品を前に文化教室の講師だった能登さんの人柄やその表現など、思い出話に花が咲いていました。



左から：能登正智《マンモスの伝説》、《ツンドラ原野》、《野牛を狩る人》2001年

移動美術展「懐かしい風景～記憶の中から甦るあの風景・あの建物16点」'13/02/05-15

本展は苫小牧信用金庫本店2階「市民サロン」を会場に開催しました。

沼田卓(1936-1999)の「苫小牧の古い建物シリーズ」10点を展示の中心に、1950年当時の駅前通りを描いた村上弥太郎(1916-1961)の《苫小牧風景》、20年前の国道36号と駅前通りの交差点付近を描いた二階堂昊(ひろし)(1926-2005)の《風景》、また旧苫小牧信用金庫本店を描いた鹿毛正三(1923-2002)の《街景》(苫小牧信用金庫所蔵)、そして、市役所12階の展望回廊から表町方面を描いた大平喜彦（1922-）の《苫小牧風景》など16点の油彩画を展示しました。

沼田作品は1980年の制作ですが、当時すでに姿を消していた建物群。「旧苫小牧駅」、「渡辺食堂」、「富士館食堂」など50歳以上の市民には思い出深い懐かしい建物ばかり。街の中心部が活気にあふれていたあの頃に思いを馳せながら、それぞれのノスタルジーに浸っていました。

左から：沼田卓《苫小牧駅前》、《丘の上の柏原医院》1980年

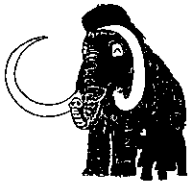
博物館移動展「冬の暮らしとスケート」'13/02/09-10

休館中の博物館資料を多くの市民の皆様にご覧いただくことを目的として「第47回 とまこまいスケートまつり」に併せ、移動展「冬の暮らしとスケート展」を実施しました。まつり会場に隣接した白鳥アリーナ1階には、館所蔵の行火や湯たんぽ、二重まわしなど冬を過ごすための道具のほか下駄スケートや機械スケート、子ども用そりなど苫小牧の冬の生活やスケートの歴史を伝える資料24点を展示しました。

また、会場には、かつて市内に点在した湿地を利用した天然リンクの変遷をたどる解説パネルや昭和時代の冬の暮らしを撮影した写真パネルを設置し、先人が築いてきた冬の生活文化を紹介しました。

会期中、アイスホッケー大会に参加した小学生が初めて目にする道具を食い入るように見る様子や、昭和初期の苫小牧を知るお年寄りが昔を懐かしむ様子が見られ、歴史や文化を伝えることの重要性を再認識する企画となりました。

▲昭和初期のストーブのポスターと暖房具



郷土学習

「郷土学習」は、苫小牧市社会科部会で作成された３、４年生用の社会科副読本「のびゆく苫小牧」の学習の一部として昭和63年度から実施しています。

今年度は、教育プログラムの向上を目指して、６月以降に来館した 15校 945人の児童にアンケートを実施しました。回答には「社会科の勉強になった」、「苫小牧のこと、歴史のことが良く分かった」という意見が多く、「もっと苫小牧の歴史について詳しく知りたい」、「もっとたくさんの昔の道具や資料を見たい」という意見が集まりました。

▲石臼の使い方について学芸員から説明を受ける児童たち

博物館大学講座

「博物館大学講座」は、「さまざまな分野の専門家や学芸員の講義を行い、郷土の自然、歴史、芸術などを幅広く学ぶきっかけをつくる」ということを目的に、昭和61年度から続いています。

今年度は、133名の申込があり津波、エゾシカ、川上澄生、支笏火山の軟石と古建築物、勇払原野の成り立ちについての講演を行いました。「バラエティに富んだ講演内容を聞けるのが良い」という意見が多くの受講生の方々からあがっており、来年度以降も郷土への学びを更に深めるための講座を展開します。

▲講演を聴講する受講生の様子

博物館クラブ

今年度の「博物館クラブ」は、18名（小学３年～６年生）のクラブ員で実施しました。

内容は、①５月：七輪で炭火をおこそう ②７月：絵の具職人になろう ③８月：花のしおりをつくろう ④10月：額縁をつくろう ⑤12月：絵馬をつくろう ⑥１月：和だこをつくろう。

昨年度からの継続員も６名いて、クラブ員同士、またクラブ員と学芸員が徐々に親密な関係になってくるのがこのクラブの特長。学芸員にとっても、楽しみな行事となりました。

▲“七輪で炭火をおこそう”で、七輪の使い方を体験するクラブ員たち

土曜体験教室

「土曜体験教室」は、６回開催しました。縄文時代の勾玉づくりから始まり、博物館の中を描く写生会、色鮮やかなマーブリングはがきづくり、土版づくり、クリスマスが近づく頃には蜜蝋を使ったキャンドルづくり、また鳥の手羽先で骨格標本と物作りをとおして歴史や自然、美術について興味や関心をもってもらおうと学芸員が講師になって行いました。

子どもから大人まで約70人の参加がありました。最初は慣れない手つきでしたが、次第に集中するようになり完成した作品を見せあったりと短い時間ですが、参加者からは物作りの楽しさや新しいことを知ることができたという感想をいただきました。

▲展示室で展示資料を描く子どもたち

ゴーゴー博物館

今年は５月５日“こどもの日”に「ゴーゴー博物館」を実施しました。展示室の各所で「ガリ版体験」、「展示物のクイズとしおり作り」、「アイヌ文様のスタンプカード作り」の飛び入り参加型の体験教室を行いました。

また、博物館友の会でも「化石のクリーニング体験」、「博物館クイズ」、「ミニ発表会」を行い、非常ににぎやかな一日になりました。

博物館の中で参加者は皆、熱心に博物館の資料を見学したり、昔の道具を使ったりしながら、大人から小さなお子様まで博物館を楽しんでいただきました。

▲ガリ版印刷を体験するコーナー

勇武津資料館通信

ふるさと歴史講座「開拓史三角測量勇払基点を考える」'12/10/20

ふるさと歴史講座「開拓使三角測量勇払基点を考える」では、株式会社タナカコンサルタント代表取締役会長の田中稔さんにお話をしていただきました。

参加者は市内在住者だけにとどまらず札幌市・恵庭市・鵡川町・厚真町・白老町などから30人を超えました。何故、勇払に測量基線が設置されたのか、その歴史的背景―北海道の開拓を本格的に始めるために、より正確な地図が必要となったこと―、当時の測量技術の解説、日米共同測量の歴史的意義などについて、また、いまだに発見されていない鵡川基点に関する会長自身の発掘苦労話に参加者も興味深く耳を傾けていました。

▲開拓使三角測量について解説する田中稔氏

見学会・観察会

自然観察会「苫小牧自然さんぽ」'12/09/15

今回の「自然観察会」では、勇払津波堆積物の観察や苫小牧東部に広がるハンノキやカシワを主とした広葉樹林、縄文時代の温暖期の遺跡である美々貝塚、ウトナイ湖、そして４万年前の支笏火山の噴火でできた大露頭などをめぐり、勇払原野の昔から現在までの苫小牧をさぐりました。

地質と植物の視点から見た勇払原野の生い立ちについて、２名の担当学芸員から解説を受けた参加者は、現在から４万年前までの環境を想像しながら、タイムトラベルをするように一日を過ごしました。

▲支笏火山の噴火により形成された大露頭を観察する参加者たち

芸術探訪「大原美術館展」'12/06/23

当館では、毎年「芸術探訪」と銘打ち、市外の美術館で開催している展覧会を鑑賞するバスツアーを実施しています。

今回の訪問先は、北海道立近代美術館で開催された「大原美術館展」。大原美術館所蔵の名品の数々により、近代から現代にいたる美術史を一望できる展示内容でした。近代美術館の福地大輔学芸員による作品解説もあり、芸術表現のもつ多様性やその豊かさにふれる貴重な機会となりました。

▲福地学芸員より展示作品について解説を受ける参加者たち

歴史見学会「札幌軟石たてもの見学会」'12/10/20

苫小牧市中心部には、昭和初期に建てられた軟石建築が３棟確認されています。こうした建築はどうして建てられ、原料はどこで採取されたのでしょう。

見学会は軟石の産地として知られる札幌市南区石山地区の石切り場や軟石を活用した公園、市内に残る明治から昭和初期にかけて建てられた教会建築などを訪ねるとともに、札幌建築鑑賞会会員や専門家の解説をとおして軟石の歴史と文化について学びました。

▲札幌市資料館を見学する参加者たち

館長コラム

博物館から美術博物館へ ｜ 苫小牧市博物館　館長　荒川 忠宏

苫小牧市博物館は、昭和60年“文化の日”に「樽前山、勇払原野の自然と文化」をメインテーマに、基本理念を「郷土の自然と先史時代の埋蔵文化財、先人の郷土開拓に関係する歴史民俗資料を収集保存して後代に伝えるとともに、これを体系的に展示、公開して市民の生涯学習にこたえ、この博物館を利用する市民が、苫小牧の自然と歴史の道程を展望して過去を顧み、現状をみつめるとともに未来への課題や可能性を考えて、郷土文化の発展と愛郷の自覚を資すること」として開館いたしました。

それ以来、基本理念に沿って、資料の収集や調査研究活動に努めるとともに、その成果をもとに特別展や企画展、博物館大学講座や各種の講演会、観察会や見学会、体験教室や工作教室など、さまざまな教育普及活動を実施し、市民の皆様に苫小牧の自然や歴史、文化について理解を深めていただけるよう努めているところです。

さて、博物館が美術博物館に至る過程は、平成20年３月に策定の「苫小牧市第５次基本計画」において、美術館を既存の施設に設置するという方向性が示されたことによるものです。また、「美術館基本構想」の根本となる理念づくりや基本構想に基づいた「基本計画」、「基本構想」の策定や決定に当たっては、フォーラムや高校生から公募の市民の皆さんによるワークショップを開催し、その議論の中で出された多くの提言や意見を採り入れ、反映させながら策定作業を進めてきました。こうした方法は、他の施設では見られないことです。

博物館は、平成24年８月より、増築改修工事のため休館しておりましたが、本年４月には博物館の再開、７月には博物館と美術館機能を併せ持つ美術博物館としてリニューアルオープンいたします。

職員一同、また新たな気持ちで魅力ある施設作りに努力して参りますので、新しい体制になる当館を、今後ともよろしくお願い申し上げます。

▲併設予定の美術館外観（2013年3月撮影）

平成25年度展示事業計画

平成25年度実施の展示事業は、美術館機能の新設にあわせ、美術展を多数開催していく予定です。

07/27-08/25
開館記念 出光美術館所蔵 日本陶磁器名品選
国内有数のコレクションを誇る出光美術館より貴重な陶磁器約80点を拝借し、大胆な構図や力強い表現、深みのある色彩など、多彩な日本陶磁器の魅力を紹介します。

09/07-09/29
遠藤ミマン生誕100年記念展　勇払原野を愛して
苫小牧の美術の発展に多大な貢献を果たした画家・遠藤ミマンの生誕100年を記念し、代表作約80点による回顧展を開催します。

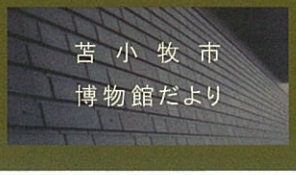
10/12-11/24
苫小牧開港50周年記念展
夢を形に～砂浜と原野にいどんだ時代
苫小牧の開港50周年を記念し、昭和38年以来、開港に至るまでの先人の努力や開港後の発展の歴史を、貴重な写真のほか当時の資料約100点により紹介します。

12/10-12/23
第7回 北海道現代具象展
毎年道内各地で開催され好評を博している同展覧会。具象表現のあり方に対し真摯に向き合い、新たな表現を追求し続ける画家28人の作品約60点を紹介します。

01/11-02/16
子どものための美術展
本展覧会は、子どもから大人まで幅広い層にお楽しみいただける企画展です。郷土及び道内で活躍する現代作家の作品や当館の所蔵作品をわかりやすく紹介します。

03/01-03/30
おはなしミュージアム／手で観るミュージアム
昔話に登場する動物の剥製や民具の展示をとおして物語の世界を伝える展覧会と、“自然美”と“造形美”という観点を切り口に、作品や資料に触れて鑑賞できる展覧会を同時開催し、複合施設の特性を活かした展示を試みます。

※ 展覧会の名称及び内容、時期等は、変更する場合がありますのでご了承ください。



平成25年3月31日発行　第62号
編集・発行：苫小牧市博物館　〒053-0011 苫小牧市末広町3丁目9-7
TEL 0144-35-2550～2552　FAX 0144-34-0408
URL http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutukan/